

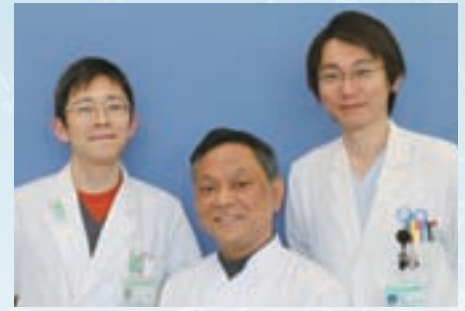


羅針盤

神戸 直智

Naotomo Kambe

千葉大学大学院医学研究院皮膚科学 准教授



本企画と一緒に携わってくれた若林正一郎君(右), エコー画像の収集に精力的に取り組んでくれた山本洋輔君(左)とともに。

第四の眼として使いこなそう

2007年の春、千葉大学の皮膚科に赴任して思ったことは、臨床が面白いということだった。人口600万人を抱える県下から典型的な皮疹を呈する症例が次々と、多くが治療による修飾を受けずに紹介されてくる環境がここにはあり、若い先生方が生き活きと働いていた。その一方で、顕微鏡やカメラなど多くの機器が老朽化しており、それらをなだめすかしながら働く様子は、無駄な努力にも思えた。

皮膚科医が臨床写真を撮り、顕微鏡で病理を観察するのは仕事として行っているのであるから、プロはプロらしく使う機器にそれ相当のお金をかけようと主張し、幸い病院の事務の理解を得ることができ、また高額な機器の導入には同門会の援助もあり、われわれの診察環境はこの数年で劇的に改善した。カメラの台数が少ないと言われれば台数を増やし、臨床写真の背景に診察室が映り込んでいる写真を指摘した際も、背景を隠す布を持つ者がいないと言われれば、すべての診察室に背景となるロール・カーテンを設置した。

なかでもわれわれが力を入れたのは、ダーモスコピーによる診察環境の改善だった。デジタルカメラそのものよりも高価なアダプターを購入して、臨床写真を撮影するのと同じ一眼レフにダーモスコピー本体を接続した。さらに撮影した写真は無線を用いて、診療系のネットワーク上に接続したハードディスクへと飛ばす環境を整え、診察室のいずれの診療端末からも、またカンファレンス時にモニターとして使っている大型TVの画面にも映し出せるシステムを構築した。撮った写真をその場で患者さんに見せることができ、また大きな画面に映して医師同士がお互いに所見をディスカッションできるようになると、自然とアレもコレも撮影してみようということに

なり、典型的な所見を誰もが認識できるようになると、なぜこの症例では違って見えるのかとさらに所見を読み解き知識を磨くようになった。

そんな診察室の片隅に、他科が使わなくなったものを譲り受けた古いエコーの機器が置かれ、ダーモスコピーで観察する病変としては深すぎ、CTやMRIといった画像で評価するには浅すぎる病変の診療に使われていた。機器の隣には、ページの角が折れ曲がりボロボロになった2004年に編纂された本誌“Visual Dermatology”が置かれており、ぼんやりと描出される白黒の画面を覗き込みながら、同じような所見を探してページをめくった思い出がある。

外来を訪れる豊富な症例に助けられ、診療機器を刷新することで、診療技術も知識も目覚ましく向上することができたダーモスコピーという成功体験を得て、次に改善すべきは体表エコーだと確信し、設備要求の費用を毎年計上し続けた。その努力が実り、2014年の春、ようやく最新鋭機を手に入れてみると、前回本誌で体表エコーの特集が組まれてからの、この10年間の技術の進歩に感動するとともに、体表エコーはわれわれ皮膚科医の診療になくなくてはならない機器であると確信した。臨床像を捉える自らの目、ダーモスコピー、そして病理診断に用いる顕微鏡に加えて、10年前の特集号の総論タイトルとして記載されていたように、まさに“第四の眼”としてわれわれ皮膚科医の診療を支えてくれるものである。

皮膚科領域の診療における体表エコーの有効性を、この本を手にとってくれた多くの皮膚科医に伝えることができれば、本企画を提案した者の一人として幸せである。